

# 30amE-188

「食品安全情報」— 海外における食品微生物関連安全情報の動向（2012年）

○窪田 邦宏<sup>1</sup>, 天沼 宏<sup>1</sup>, 春日 文子<sup>1</sup>(<sup>1</sup>国立衛研)

【目的と方法】国立医薬品食品衛生研究所安全情報部では2003年4月より、食品の安全に係わる国際機関や各国公的機関を中心に最新情報を収集、評価し、重要なものは概要を隔週報「食品安全情報」として当所ウェブサイトにて公開している。今後注視すべき食品安全上の課題を把握するために、2012年1月～11月に発行した24報に収録されている食品微生物関連安全情報を総括し、考察を加えた。

【結果と考察】対象期間に取り上げた食品微生物関連安全情報は333件で、件数が多い順に、アウトブレイク調査とその追加調査、各国機関の活動状況、サーベイランスの結果、警告関連、回収関連、ガイドライン改正、リスク評価等の情報を頻度高く紹介していた。病因物質別では、2011～2012年に大規模なアウトブレイクの原因となったサルモネラ、コレラ、大腸菌、カンピロバクター、リステリア等に関する情報が多かった。情報源としてはWHO、欧州食品安全機関（EFSA）等の国際機関や、米国、カナダ、英国をはじめとする各国の食品安全関連機関が中心であった。2012年には米国でマグロ製品やマンゴーによるサルモネラ、チーズによるリステリアなど、輸入食品によるアウトブレイクが多く発生し、それらへの対応にPulseNetやRASFF等の情報ネットワークが活用されていた。またマンゴー、カンタロープメロン、ハウレンソウ、マグロ寿司といった加熱調理を行わない生鮮食品やその原材料が原因となったアウトブレイクが多く発生し、生産時から流通、喫食に至るまでの継続した衛生対策の必要性が指摘された。我が国においても諸外国におけるアウトブレイク情報、食品回収情報やリスク管理の動向に注視し、リスク低減に必要な情報を適時、適切に提供していくことが重要であると考えられる。